



長歌撰格

下

~ 4
4422
2



ちつよにあらうてむむ御書直にその頼みとる人々の歌と
 もてきへむかへ専道とよく心ふいりあんとてつくすへと
 ふらふまめとせしほありかくて其人等のうゝをせくに
 やく其家集ともより別置きれといきく刊行ありけりか多く
 半ハ寫本にて中あきいと乏きもありせれハ。是へて人の手
 近く引合せ見む便むもとて。こゝせハ世に善く行けり。菅根
 集 此書ハ契沖真淵以来古学者の家集を普く輯て其中
より宜きをとてたに清水濱臣授て刊行せし書也の張數に
 改め直志て出志つり。此丁數の前後入す。まじるもあるを見
 て殊更ふけりすかゝのよりけりぬ歌をそり出て云やうふも足ゆ
 めれと然にそあはれ大くの歌のすかゝハ姿とて先一わ
 里出。其次ハ皆其人の歌の中にも殊に宜しとて。時に譽れ
 ありつるを。あひと抜出てまきまる所あり彼丁數の前後入す。

里つるハ。たゞ其歌ともの種類にやうれて。こゝかへてハ入ま
 たり。又家集と菅根集と其巻のちへは。因てあり。それら其
 本集を足ん人ハ。おれつりら。知へたそのそ。こゝに先。近世の大人
 ころハ。常ふもけりやとて。ゆめは。所の其大方のけり。まきまる。

菅根集八丁宣長

あまのうけ 秋の山の ますのまの まのまの けりをり せむおひて
 めのまの まのまの 川のまの 堤のまを けりをり ありのまの
 可はまの まのまの やまのまの けりをり けりをり けりをり
 人々のま 秋のまの はやまの まのまの まのまの けりをり
 そのまの まのまの まのまの まのまの やまのまの けりをり
 けりをり けりをり けりをり けりをり けりをり けりをり
 いまのま せむまの まのまの まのまの けりをり けりをり

云物より物にいらりしりてはるる事あり何事故に
 結むるはれりいほりるも只詞の絶むを限さしけり多
 かるる事ありいほりるも只詞の絶むを限さしけり多
 かしらるる是を筆して物に録きりてのりらるるは拙く俗
 せしむるはしらはらるるして今物より物にいらりしりてはるる

六十一丁 葉沖

かしらるる是を筆して物に録きりてのりらるるは拙く俗
 せしむるはしらはらるるして今物より物にいらりしりてはるる

長流

四十三丁

かしらるる是を筆して物に録きりてのりらるるは拙く俗
 せしむるはしらはらるるして今物より物にいらりしりてはるる

十七丁 枝直

かしらるる是を筆して物に録きりてのりらるるは拙く俗
 せしむるはしらはらるるして今物より物にいらりしりてはるる

此翁の歌に局をて然るも若くは千陰春海其他の人この歌に
 恒多ありしハ前後を引る歌ともみてもかつかつ見しにあり
 今ハ例の多かる中多し一二を引出て其大方を知らる也又一首
 此起句より打つけし其事を打出て、
 凡そかくさすんつゝるは長歌なり殊にいやよく聞ゆこも又
 此翁の歌に局をて然るも若くは千陰春海其他の人この歌に
 恒多ありしハ前後を引る歌ともみてもかつかつ見しにあり
 今ハ例の多かる中多し一二を引出て其大方を知らる也又一首
 此起句より打つけし其事を打出て、

百廿六丁 宣長 富士山奇
 出たてく 言ふとよとく へすうへた 山あふのぬ うつまね 神と神と
 しあつく ともたしひい ぶちさきと 田うしむわ 田うしむわ 田うしむわ

百八十六 同 悼道麻呂奇
 いめかき けつつらふい 道さうハ 命死きや 玉ほその 人そつと
 志かあし志 久あせぬい こそくそく ちける地を 志かあし志 命死きや

此類をよむ。つたあく陋志き方に聞あを海か多あり。短歌ふに
 らう。けした歌ふ也。序語枕詞それくのみく。詞ある。そのを
 けすかり長き長歌の上。そきふ應。ち。釋言。後設ふやのちた
 事やはあらむ。可くい。崇神記ある。いはやみまを。入。

後悪される言やり出て拙といひ出はる言の類ひある事
 の切なり時おやハ。うた大音聲の代りに言らりかへてあひの
 きし人をやまはらま切りのある物なりとて忘ら大聲にあらか
 きくいひ烈するちよあうくたもかりやさしくみやあうら
 うのうんおあハ。同一言を重ねるにそのりーうはもーか
 らきてあうへううけ。若しこれをわろくうさねりてゆう言吃
 家人の物いひ哉。聞らぬふあゆれむりたやよく此さういふ
 心せは忘る。今も里後の人にも猶此あうら受つてへられ
 かうつ。まー事も繰返してはく。也。又かの疊句對句あとか
 偏重に置る事常多し。片違とは一聴に相並へる句とり右行也。
 左行と詞のゆりみ韻語していつきか一方應せぬ所はる志はる
 をいふ。即次にし出を歌とりけ傍に。如此批点を加へて。その

應せぬ所を知らるありそのさまといは

五十六丁 真淵

おつされる きのみくら 百千里 赤らねる
○○○○ ちりちり 六尺ゆれと ちりちり ちりちり
 ややあうら 物たえつ けいちは 少きちりぬ
ちりちり ちりちり 赤らあか 云て下六句略之は單句也

四十七丁 春郷

上七句略之 志うらも 人の少き けうきも
あうら あうら ちりちり ちりちり ちりちり
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

これらの如く此内を一ついけ右行を「百千里家ハあれ」ともや

善のりや。山もみり。山もみり。山もみり。

秋の夜を。河もみり。河もみり。河もみり。

かやうに互ふ阿の應一て一句も詛語で凡實語虚語そのてれを
はふ到るまで一も一も違を以左右正志くそろへてあみしり
くは下をけの下け言の換れりもあふ其墨對とも卒の句
より次へいひ送る時のとさふてそれ古た世の歌ハ猶れ互
ふか多くして危て皆いとわてそり正き物に
そありや。此送り詞の多ハ次條れよく論をへかくてこそ歌
れ歌も志くへとも云へそりたれ凡そ此等の多ハ恒に誰も
くく心得しるわりくちしてそあゆと然か心得うせり人の歌
を又ゆふ猶句と偏乖れ多けれハ上卷の歌ともふて明可ん志
られしるわきありやゆと更にかくハ可た並へてかきくそや
わふふりわめふ今この世け人の心ふやゆそ可正志き物と
もわりいさうけてふわめか一の空よハめふてそのせりも

有へく又ある也。近來の大人もこれ歌とゆれみきりかり一死對
句ともを聞あらしやとあらしての世かふるもあへこれハ例の
ゆふけふたわめれから其大人もこれ歌の中ふも既に人とのと
り一とゆるち歌ともゆをハかつく後出直一被くけへて其
世かみを知へし

七丁 真測

百子やう ホトトギス

木枝をき ホトトギス

やあしこき
ほつ枝をき ホトトギス
志つ枝をき ホトトギス
人あかし ホトトギス
「やあしこき」

同丁 同

年こそき 鼻繩

まの枝に *shimobara* [] とくの人まの程

三十九丁 同

善花に *shinobu* とく

まの枝の *shimobara* とく

やりの *shinobu*

花の *shinobu*

まの *shimobara* [] とく

百六丁 千葉

けり *shinobu* 國

國 *shinobu* 人

とく *shimobara*

けり *shinobu* 國

國 *shinobu* 人 *shimobara*

百五丁 春海

けり *shinobu* 國

た *shinobu* 國

とく *shimobara*

けり *shinobu* 國

た *shinobu* 國 *shimobara* [] とく

三十二丁 土浦

けり *shinobu* 國

た *shinobu* 國

とく *shimobara*

けり *shinobu* 國

た *shinobu* 國 *shimobara* [] とく

先くはわつがふ出ま。これら皆得意の歌ふして中にもとろく見さるる對白たふ猶ひひめてゆきは。かくのやや。是れまにらへて。近世の大人もま。まへて句調乃みりある事を。ま。

又井のわしとまむしりる此のこゝろに
もくたあちけつ上らるる一送詞を云ふ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろの句をよみて送る時を全く同一のこゝろに
あまのこゝろのこゝろにこゝろにこゝろにこゝろにこゝろに
あまのこゝろの事もある

一丁 契沖

あまのこゝろ

あまのこゝろ

五十二丁 土満

あまのこゝろ

あまのこゝろ

百三十二丁 真淵

あまのこゝろ

あまのこゝろ

九十八丁 春郷

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

河をれき 河まきま けりしや ち

かく左右正志く相並へていけいもきて下のつゝきんいさ
可妨々もあつは家をあそむ背きていへる今世の歌は常あり
凡そ古たゝに然るつげいさう一所を垂きてつげらるあ
はるあつて又

七十三丁 真淵

千原まきま ちかまへく
あひそやの ちかまへて

十丁 千藤

國まきま ちかまへく
ちかまへて ちかまへて

百十三丁 春海

あまひらの ちかまへく
ちかまへて ちかまへて

かやろんちかまへていひく〜常多〜ちかまへていひく

ちかまへていひく〜常多〜ちかまへていひく

あまひらの ちかまへて

あまひらの ちかまへて

あまひらの ちかまへて

あまひらの ちかまへて

あまひらの ちかまへて

あまひらの ちかまへて

如此先つ正しく墨句をまきま對句に作るや、お並ふ句をまきまはて
さて其次にまきまの句ありて、切り續くもするこそ上つ代の句
格をまきまありて又

三十三丁 土満
ちかまへて ちかまへて

あまひかち せうはくす かあつん ちう

是れ對せんかやうの詞のうへまの上の例の如く今一句そへ

て

やうつね ちうあつせ

かきつね けんせ けいせ けいせ

云々

かくまにいらし時をちうへる破ら後あやもそひつをまぬん
やかれるをや又近來の人れ心くせりて世にしちへるま長
句りて對をやれると殊ふ多く思ゆそを

百丁

真淵

かきみつろ あまひかち ちうあつせ

あまひかち せうはくす かあつん ちう

あまひかち せうはくす

あまひかち せうはくす

あまひかち せうはくす

あまひかち せうはくす

あまひかち せうはくす

あまひかち せうはくす

あまひかち せうはくす

あまひかち せうはくす

あまひかち せうはくす

あまひかち せうはくす

あまひかち せうはくす

百四丁 千蔭

下廿一

其間に疊對ふとい入りて。二段あるを三四段れるも。如のく
 一段毎に句格正志く備まる。是其けちありか。可く終ハ。彼章
 段の中にたまく二段ふちうへは。奇の上の一段と。下の一段を
 相對せるや。られ句。き。終る。ふもあ。る。し。おの。つ。つ。ふ。て。
 只物二つ相
 向ふ可故也
 此意味を。上條に舉た
 是歌とるを。よくかりて。さ。さ。る。へ。か。の。萬。葉。卷。五。に

まよひの

此二句枕詞格
 くらあゝの せいのふらふら くらあゝの せいのふらふら

くらあゝの せいのふらふら くらあゝの せいのふらふら

くらあゝの せいのふらふら くらあゝの せいのふらふら

くらあゝの せいのふらふら くらあゝの せいのふらふら

くらあゝの せいのふらふら くらあゝの せいのふらふら

已上二段。廿八句中。一句對。二句對。四句對

まよひの

くらあゝの せいのふらふら くらあゝの せいのふらふら

くらあゝの せいのふらふら くらあゝの せいのふらふら

くらあゝの せいのふらふら くらあゝの せいのふらふら

くらあゝの せいのふらふら くらあゝの せいのふらふら

まよひの

くらあゝの せいのふらふら くらあゝの せいのふらふら

くらあゝの せいのふらふら くらあゝの せいのふらふら

くらあゝの せいのふらふら くらあゝの せいのふらふら

已上二段。廿八句中。一句愛疊。二句聯對。三條疊句。二句。あ。ま。り。さ。し。く。

さて彼長對と章段との差別ある事。上卷より章段乃條下八千予
 神御歌又藤原御井歌とに合せて知へし。但し彼條の歌とりの
 際疊隔疊等にくらみれば。此五卷外なるハ。いづく劣るは。是を既
 小云如く。奈良朝とありても歌の衰へたるを。是をりて
 せ長歌の風調句格ハ。只々上古に正しく雅とては。方に就て。學
 ぶ然るる。上の歌ちくや。いへるか如し。又近世乃歌と
 かの長歌對句を合せて。一方句數の且はさるも多くとゆ。こそそ
 れ對のあまりに長かるる。に。この合を。試志きて。然るや。あ
 り。心得ぬ。り。あり

百丁 千蔭 此等對 右行六句 左行四句

みゆりの 田舎のやね かつらのの ぬるやね ちの ちの
 ぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね
 一句不足

何くすま 天をわらふ云
 一句不足

四十二丁 同 此等右行四句 左行六句

枯く 射る かつ矢の如く 一句不足 一句不足
 ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね

九丁 同 此等右行八句 左行四句

ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね
 ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね
 一句不足 一句不足 一句不足 一句不足 一句不足

ちのぬるやね ちのぬるやね

三十六丁 春海 此等長對 右行六句 左行十二句

ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね ちのぬるやね
 一句不足 一句不足 一句不足 一句不足 一句不足

はき

百一丁

ふらり

都へり

そのまき

都へゆへおのつゝみのはまの

まき

まき

たふぬ

此歌つゝけろは

違ふ

東

都

そのまに

その花の

ま

ま

ま

は

は

立かへ

かやうに云へたる凡彼老翁のうへの中にのみ得られしや
おゆを此等と云ふ此外も上條に出る吉野山の歌と
彼ハかの顛倒の對句又此違の對句と云ふれり

志直し改められたる、まうしとも申しかたし。此に其試もいと
ふへたれども既ふ上より引くもハ省きぬ
かくて上のをちくいと照ハ、めはら風體と句調の上れを
料之、歌ハ昔より心詞といひて、其意趣をよくおのいひき
有へうらひ、さしあはぬ事とふ。右のうらへをそへ
て何のきく照可あらん。わろかあらん人の、台た衣
あもうらへてかゝる。こゝに、記紀萬葉寺のめてふた奇とは引
て其意旨を深くおのせ入へふ子をよきまゝにかれと、あ
まにうらへておのせ入んとて其事ハ、短歌文章ハ、格ハ
て漏志、互に照し合せてさやしてよ、其中ハ、長歌ハ、
を重みまへま、そのあれハ、先此卷ハ、句格ハ、
けとあ、あり。さて然る古へは、句格ハ、習せしむふも、
又其わま

め有へるありあうし、彼賀茂翁の頻りう古風を唱へら
あふ其をへ手ら師の心にかあへあやて、さうに古
殊更ふ再遠を虚語をうりい、わさと五七の格ハ、
ておのかあ、くみそいれ今とをうくに、其はとの詠
ちの残るを足る事あるに、其頃のうらへ、拙さ
まねのみあして、却てあうへのや、わらぬを古風と心得
あふ、むきにあつ、かあて、更に歌のやうも、
は、色と、そのあつ、を、けら古字を、
ハ、心けらうらへ、さけら、
け色や、わらぬのうらへて、其処を、
れぬそととて、あつ、ゆら、
くろく、あつ、其類ひ、

海も合せても志すそかゝる所。其の事一子等ハたゞ一旦の
才さひこゝろふれりてその程をかくる事とせりし程にて
に於ておもしろせられ年月ある中、はかしのくも学せむたて
後ふ立ちしわだれハ何ぞかやむとつとくも聞ふまれ人情も
入かてに足えてたゞ古古の口まききし時、あふ可われから
志くありて死て多とハ棄てし。又後ふ直し改めたるもこれ
色又ゆ其ハ遠かうすえらひし。あゝ八十浦玉やの書みそり
くこちく志すも海し王たりしを。それき近北上木せる所
を。あまのしを。皆別置拵しるを。そとを。後悔の程を
秋は。其中ふ。既ふをいひし。とや。揖取魚彦。藤木田。久
後てきて。かのす。つと。おま。と。も。あ。つ。た。め。は。か。た。と。又。さ。こ。れ
や。と。し。ら。れ。家。集。の。事。吹。の。の。れ。り。も。足。ゆ。本。居。宣。長。を。と。も。皆。ま

つと拵を志て。彼家集の古躰部や云に直しを加へて。これいさ
せし。今それら足るに後ふ。と。加筆せし。ち。猶。枝。葉。の
き。枯。木。の。こ。ち。て。色。も。あ。ら。せ。も。あ。し。か。く。て。言。葉。花。さ。く。春
に。お。け。の。の。あ。ら。け。又。情。ふ。そ。も。事。を。さ。つ。か。め。う。く。て。
か。れ。器。を。せ。ら。れ。て。十。や。せ。の。の。後。その。門。人。の。歌。と。り。れ。俄。に
近。躰。ふ。あ。り。こ。ゝ。ハ。あ。ま。ま。め。と。く。り。う。い。れ。と。心。あ。る。や。と
の。歎。々。と。こ。や。め。の。あ。れ。と。こ。ち。か。の。一。旦。け。す。う。言。に。い。く。と
手。ろ。う。と。て。お。ち。ま。れ。つ。き。一。故。を。あ。り。う。山。た。ち。に。衣。剥。き。て
さ。う。筈。の。麤。く。ふ。お。け。や。か。笑。ふ。下。堪。は。る。事。や。ま。あ。り。そ。ん。く。と。知
程。乃。中。を。み。こ。そ。わ。き。ま。か。つ。れ。ま。れ。あ。き。や。お。り。ひ。の。あ。れ。を。け。か
事。と。て。及。せ。あ。き。高。ね。の。岩。め。ね。ふ。さ。こ。ら。み。る。お。つ。き。ハ。お。つ。と
て。ふ。り。や。の。岩。底。ま。て。ま。ろ。い。墮。ち。是。お。の。り。平。ら。に。行。ぬ。き。道



稿守部先生著述

長歌揆格

全二冊

董萊舍藏梓

定價

三十元